

特集
ゆるやかなネットワークから
生まれるイノベーション

十符の里びと16人目
美術作家
佐竹真紀子さん

From RIFU-CHO CHALLENGER
利府おもて園
近江貴之さん

利府駅前tsumikiから
まち・ひと・しごとを発信



特集

ゆるやかな ネットワーク
から生まれる

イノベーション

2016年に利府駅前にtsumikiがオープンし、11月19日で丸5年。開設時から小商いという働き方に着目し、スモールビジネスにとどまらず、コラボレーションによる事業創造を意識した働き方を支援してきました。その支援の核となる起業塾は、2017年～2019年まで「こ・あきない塾」と称して開催。塾長を筆頭に多方面から講師、アドバイザーを招き、小商いを始める方に向けて貴重なアドバイスをたくさん頂戴してきました。

生き方と矛盾しない自分の軸を持ち、
一つの小商いを創っていくことが
持続可能な仕事になると思います。
—2017年度講師：ヒビノケイコさん



今は事業という形でやっていますが、
最終的には「文化」となって、
人の中で息づいていくような仕事を
していきたいですね。
—2018年度講師：重(橋本)陵加さん



地方には力があります。
みなさん一人ひとりが地方を元気にしてほしい。
未来はみんなの手にかかっているのですから。
—2019年度講師：渡邊智恵子さん



また、コロナ禍の影響を受けた2020年度からは「新・生業塾」へと衣替えし、地域資源を活用し魅力的な仕事づくりを行う方々に寄り添う伴走型の支援を行ってきました。

5年間で塾の受講生は、総勢26名。これからも時代にあった新しい働き方、利府町だからできる働き方を模索し、地域の資源を掛け合わせ、新しいビジネスの創出を目指す人材育成を続けていきます。

「あったらいいな」を 自分たちの手で

「こ・あきない」をとおして社会とつながる

起業塾の受講をきっかけに、子育てや生活の中で直面する課題に向き合い、自主的に事業企画を立て動き出した事例を紹介。

2020年度
新・生業塾生

すだ ゆうか
須田優佳さん
ママと子どものほっこり親子教室
りとりてって(利府町)



「子育てをもっと心地よく」をコンセプトに、利府町を中心に活動。乳幼児の親を主な対象として、おむつなし育児、子育てヘッドバイス、布ナプキン、ベビーマッサージ、アロマクラフトなどの講座やワークショップを実施しています。

ゆるっとナチュラル
マルシェ
主催のおふたりにお話を伺いました。

—現在の仕事をするきっかけを教えてください

〔須田〕出身は石巻市ですが、結婚後夫の転勤で栃木へ、そこで妊娠出産をしました。いざ、子育てが始まると、見知らぬ土地で頼る親族も友人もなく、育児情報はインターネットで検索、ほとんど引きこもり状態でした。ある時、病院に置いてあった一枚のチラシを手にとったことがきっかけで、ベビーマッサージの教室に通うようになりました。自宅以外に自分の



居場所が見つかったことで前向きになれた気がします。続けて講師養成講座を受講、資格を取得。開業するまでになりました。

〔岩測〕子育てする中で、3番目の子どものよだれが多く皮膚も弱くたれたり、一日何回も着替えが必要だったり困っていたとき、吸湿性が良い多重ガーゼに出会いました。はじめは市販品を使っていたのですが、もっと使いやすいハンカチやスタイが欲しくなり、厚さやサイズを改良し自作したのがきっかけです。少数派ですが、自分と同じような育児の悩みを持っている人に届けたいと製作販売しています。

—tsumiki主催の起業塾を受講されていますね。

〔岩測〕2019年度のこ・あきない塾を受講しました。今は、布小物づくりをしていますが、裁縫でひと花咲かせようというタイプではないと思っていました。私は3人の子もがいます。その子育ては決して楽しいことばかりではありませんでした。むしろ辛くて悩んだ経験があるからこそ、何かお手伝いをするところがあるのではないかと思います。塾を受講することで、自分の経験から子育ての楽しさを伝えていく方法は何かを、じっくり考える機会になりました。

〔須田〕2020年3月に栃木から利府町に引っ越してきました。じつは、栃木にいた頃からtsumikiの存在は知っていてホームページやSNSをチェックしていました。利府町で仕事を始めるにしても、とにかく地域でのつながりをつくりたかったこと、ゆくゆくは地域の子育て支援活動にも携わるために学びを得たいと思い、2020年度新・生業塾の受講を申込みました。一人でも多くの人に、自分の活動を知ってもらいたかったので塾を通じて人脈が広がったことは、大きな収穫でした。

—塾受講後のチャレンジが10月に開催した「ゆるっとナチュラルマルシェ」ですね。

2019年度
こ・あきない塾生

いわぶち ゆきこ
岩測有希子さん
いっこ いっこ
布小物 iiko iiko
(利府町)



利府町在住の布小物作家。ガーゼハンカチ、スタイなどの他、利府梨をイメージした梨巾着や巾着にお手玉をセットにした「梨玉」を制作。マルシェイベントなどへ出店し対面販売を行うほか、2020年よりtsumikiの委託販売に出品しています。

つくれる気がしました。個々の特技を生かし、暮らしの知恵やアイデアから生まれる新商品開発もやってみたくです。その一つとして、布ナプキンの開発。岩測さんが作るガーゼ製品のように困っている人には必要な商品だと思っています。〔岩測〕日々生活をしている中で、大事にしたいことを掘り下げていくと命について考えることに行き着くんですね。周りには、見えにくいけど、子育てに行き詰まり孤立したり、虐待や貧困につながる問題が潜在していると感じることがあります。自分たちの体験や知識を伝えることで、少しでも暮らしやすくなる手助けになるような方法と可能性をさぐりながら実現していきたいと思っています。



〔岩測〕日々の生活をしていて、大事にしたいことを掘り下げていくと命について考えることに行き着くんですね。周りには、見えにくいけど、子育てに行き詰まり孤立したり、虐待や貧困につながる問題が潜在していると感じることがあります。自分たちの体験や知識を伝えることで、少しでも暮らしやすくなる手助けになるような方法と可能性をさぐりながら実現していきたいと思っています。

—これから、どのような仕事や活動を進めていきたいですか。

〔須田〕子育て中のママたちは、いろいろな特技をもっているのだけど、発揮する場がなくて悶々としている人が多いです。今回の企画をやってみて、同じ思いを持つ人とつながれば、どこにでも「場」は

陶芸作品を制作し、マルシェイベントなどで販売しています。生活をちょっと楽しくする器は、作品の繊細さと可愛らしさからファンが多く人気です。陶芸に興味を持つ人口を増やしたい、作陶の幅を広げたいと塾を受講。各所で親子向けの絵付けワークショップを行い、陶芸の楽しさを広め伝える活動に力を入れています。また、地域資源を生かし、梨灰を釉薬に使用した器づくりにも挑戦し表現の幅を広げています。



利府町のんびりまち歩き

「利府焼」を創る陶芸家たち

案内人●tsumikiスタッフ 葛西淳子



どれも欲しい!

利府町で活躍する4人の陶芸家が集まって、8月21日、22日に「利府の陶芸家4人展」を開催しました。春先に剪定した利府梨の枝を燃やした後にできた灰を使って、器を制作。「利府焼」と名付けた、4人4様の陶芸作品をご覧ください。



Ichioka pottery
市岡 泰

工房は、町内の住宅街にあります。素材のもつ質感を大切にしながら、日々の暮らしを彩る器をめざして生活に寄り添い、使う人に暮らしの喜びを感じてもらえるような器を制作しています。

●Ichioka pottery
宮城県利府町官谷台1-5-8

町内の梨農家さんから頂いた枝を自宅の薪ストーブで焚いて、残った灰を釉薬にして制作した器です。材料の土の違いによって風合いが異なるのが面白い。



アトリエ陶の泉
須田聡宏

陶芸教室を開講し、多くの人にもづくりの楽しさを、そこからつながる人の輪を伝えたいと活動しています。学校行事・子供会行事などへの出張陶芸教室、陶器販売も行っています。

剪定した梨の枝を燃やし、その灰を精製・調合した梨灰釉を使用。梨の葉のようなやさしく自然な色合いに仕上がりました。

●アトリエ陶の泉
宮城県利府町官谷台3-24-3



nocolier
熊谷苑子

ソノコのアトリエを略してノコリエ。「日常をちょっと楽しくする陶器」をテーマに作陶しています。クラフトイベントへの出店や絵付けワークショップなどを行い陶芸の楽しさを広げています。

梨灰はアクセント的に10%ほど使っています。焼き上げてみると、思った以上に梨っぽい風合いに出来上がりびっくり。

●nocolier(ノコリエ)
Instagram @nocolier



INAGO BALL
鈴木俊明

自宅の離れに工房を構え、歯科技工士として働きながら陶芸家としての顔を持つ異色作家。土に残る指、削り、ロクロ、ビビの痕など土のありのままの自然な姿を活かした焼き物を創り出しています。



梨の灰を使うのは初めての挑戦でしたが、なぜか梨っぽいココボコした肌には焼き上がりそれが個性となりました。

●INAGO BALL

利府焼は、利府梨の木の灰や利府の土を原料として使うことで、温かみのある郷土の風合いが表現されています。今後、利府の特産品として親しまれていくことでしよう。須田聡宏さん、熊谷苑子さんの作品は、tsumikiセレクトショップでも販売しています(2022年3月末まで)。お気に入りの器を探してみてください。



tsumikiで出会った仲間たち



あべともこ
阿部知子さん
☆ころころコロンタン☆
(多賀城市)

2020年度新・生業塾受講

美味しい食べ物と飲み物があるカフェをつくりたいと、塾を受講。屋号に「ゆるっと、ゆかいなみんなの自然派おやつ店」とキャッチフレーズをつけ、植物性素材を使ったグルテンフリー菓子を中心に製造販売しています。食物アレルギーの悩みを抱える方や無農薬、化学物質不要の自然派お菓子を売りたいという方から要望が多く、野菜や豆腐を使ったレシピを開発中。マルシェ出店の他、食のイベントとのコラボメニューも手掛けています。



しょうじみほ
庄司美穂さん
コトリコーヒー
(多賀城市)

2020年度新・生業塾受講
2019～2021年委託販売出品

実店舗は持たず、自家焙煎珈琲、焼き菓子、パン、ジュムの飲食店への卸し、委託販売、ネット販売を夫婦で経営しています。北海道産小麦を使用した無添加の天然酵母パン、豆の品種、精製方法など生産履歴が明確なコーヒーを選び、なるべく安心安全な材料を使いたいという商品づくりが信条です。一方で自身も化学物質過敏症であることから、当事者が集まる場「コトリじかん。」を設け、互いに抱えている悩みや問題を語り合う場もつくっています。



しみず はるか
清水晴佳さん
アトリエ ジェルメールブルー
atelier germerbleue
(利府町)

2021年こ・あきない市出店

今年利府町に転居してきました。花屋で働いてきた経験とフラワーアレンジメントの技術を生かし自宅教室開業の準備中です。販路拡大と認知度を上げるため、tsumikiを利用して生花販売と花育体験ワークショップを実施しました。「花育」とは、生命を慈しみ、子どもの自由な感性を伸ばす活動です。親子で花や緑と親しむ時間をもちながら「花育アルバム」を作成し、子どもの成長を実感してもらうことを大切にしています。



くまがい そのこ
熊谷苑子さん
ノコリエ
nocolier
(利府町)

2020年度新・生業塾受講
2017年～委託販売出品

陶芸作品を制作し、マルシェイベントなどで販売しています。生活をちょっと楽しくする器は、作品の繊細さと可愛らしさからファンが多く人気です。陶芸に興味を持つ人口を増やしたい、作陶の幅を広げたいと塾を受講。各所で親子向けの絵付けワークショップを行い、陶芸の楽しさを広め伝える活動に力を入れています。また、地域資源を生かし、梨灰を釉薬に使用した器づくりにも挑戦し表現の幅を広げています。





オープンイノベーションセミナー 株式会社 日の丸ディスプレイ仙台 見学ツアー

利府町内のオープンイノベーションをより加速させ、現場にある技術やノウハウを体感するために工場見学ツアーを実施します。優れた技術に応用する新たなアイデアの創発の場として、他業種の方やクリエイターの参加をお待ちしています。



内容	2021年12月17日(金)13:30-15:00
	【集合場所】株式会社日の丸ディスプレイ仙台 (利府町しらかし台 6-7-1)
	【定員】10名(要事前申込)
	【参加費】無料
	【企画・運営】一般社団法人Granny Rideto 【主催】利府町

利府町まち・ひと・しごと創造ステーション tsumiki 利用者意見交流会

語り尽くせ！まちをおもしろくするために
tsumikiができる100のコト

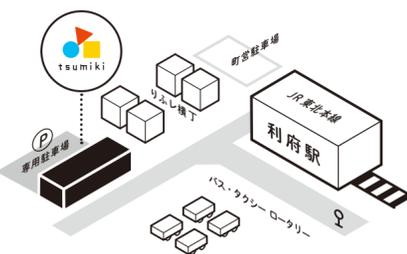
tsumikiが開館してから5年。これまで果たしてきたtsumikiの役割、それに伴う成果や課題についてふりかえり、より良い施設運営や今後のまちづくりに向けて、利用者である町民、設置者の行政、運営責任者のGranny Ridetoが語り尽くす場を設けます。



内容	2021年12月18日(土)14:30-16:30
	【会場】利府町まち・ひと・しごと創造ステーション tsumiki
	【定員】20名(要事前申込)
	【参加費】無料
	【企画・運営】一般社団法人Granny Rideto 【主催】利府町

各種イベント・講座のお申し込み

【TEL】022-766-9231 【E-mail】info@rifu-tsumiki.jp
お名前(ふりがな)・住所・電話番号・メールアドレスをお知らせください。



利用時間
9:30-17:30
(水・金曜日は21:00まで開館)

休館日
火曜日・年末年始

〒981-0104
宮城県宮城郡利府町中央 1-5-2
TEL 022-766-9231
FAX 022-766-9232
Email info@rifu-tsumiki.jp

設置者 利府町(商工観光課シティセールス係)

利府町では、地方創生に向けて良好な住環境に「ワクワク感」をプラスした魅力的なまちづくりを進めています。起業・創業や「利府ならではの」のシニアを迎える中で、おばあさんになっても笑顔で暮らせる社会をつくりたいという意味が込められています。同時に「Granny」には「おせっかい」という意味があり、地域のおせっかいはやく役割を担うという意味が込められています。

管理運営(業務委託者) 一般社団法人Granny Rideto

Granny Rideto(エスペラント語)は、日本語で「おばあちゃん笑顔」と訳します。これが高齢化社会を迎える中で、おばあさんになっても笑顔で暮らせる社会をつくりたいという意味が込められています。同時に「Granny」には「おせっかい」という意味があり、地域のおせっかいはやく役割を担うという意味が込められています。

公式ウェブサイト
rifu-tsumiki.jp

Twitter
@rifu_tsumiki

Facebook
<tsumiki>で検索

Instagram
@rifu_tsumiki

「つみきのきもち」は、利府町内を中心に隣接する市町村の公共施設、カフェ、店舗などで配布しています。

つみきのきもち vol.16 発行日●2021年12月1日 発行●利府町 企画●一般社団法人Granny Rideto
編集●葛西淳子・五十嵐千晶・桃生和成(一般社団法人Granny Rideto) デザイン●伊瀬谷美貴(interagrie)

— CHALLENGER

利府おもて梨園
おうみ たかゆき
近江貴之さん



—— 30代半ばで大企業を飛び出し、地方の農業へ

仙台出身の近江貴之さんは、東京で大手通信会社に就職しました。会社時代は、自身で考えた販売戦略により成果が決まる充実感があっても、商品開発からエンドユーザーに届くまでの全プロセスに関われないジレンマがあったそうです。そんな思いを抱いていた2018年の冬、都内で参加した地方創生イベントで、梨農家育成を行う利府町地域おこし協力隊の募集情報を知り「自分自身のものづくりを生業にするチャンスだ!」と転身を決めました。

2019年7月、地域おこし協力隊に着任した近江さんは、利府梨の栽培技術を学ぶ中で農産業に横たわる課題に直面します。その一つは規格外や傷物の梨の廃棄問題。そのほとんどが動物の飼料になるか廃棄するという事実でした。この実情を打開するため、廃棄梨に価値を付けられないかと、近江さんは考えました。

—— 傷モノの梨が廃棄物から新商品の主役へ

協力隊着任と同時に、利府梨カレーの開発に着手。梨の風味を活かすスパイスの組み合わせ、甘さ辛さのバランスなどの研究と試食を重ね、2020年2月に初のイベント出店を果たしました。さらにtsumikiのごあきない市に出店し対面販売の経験を積んだ近江さんは「皆さんのフィードバックを得て味の改良ができたこと、小商い実践者として同じ志をもつ出店者同士でつながりを持てたことで、自らの商品の認知度アップを図れたことが良かった」と振り返ります。そして、次のステップとして2021年からは梨カレーのレトルト化に取り組みます。レトルト商品を通して利府梨のPRを全国や世界にも届けたいという、さらなるチャレンジでした。

—— レトルト化にむけての挑戦

レトルト化のプロセスは容易ではありませんでした。製造会社に共有するレシピの書き起こしは、材料の計量を1g単位で何度も修正し、誰が作っても均一な味になるよう緻密な作業を要しました。また、パッケージデザインも、届けたいユーザー層、価格戦略や販売戦略を絞りきれず苦慮したそうです。商品開発の全工程に関わることは社員時代からの悲願でしたが、全責任が自分に返ってくるプレッシャーも大きかったようです。関係者や地域の方々の応援を背に受け、2021年7月に「金の利府梨カレー」が完成。町内各所やネットショップで販売すると完売続出。地域の事業者からも熱い視線が寄せられ、なかでも沢乙温泉うちみ旅館の利府産源流米とのコラボは、地域のPRにもなり期待される事例の一つです。「規格外や傷物の梨に価値をつけ活用することに取り組んでいきたい」と意気込む近江さんの今後に注目です。

取材・文 佐々木将太

“ 金の利府梨カレーを町の名物にします！ ”

— INFORMATION

利府おもて梨園 近江貴之

- ☎ 090-3756-5150
- 📍 利府おもてなし園サイト
https://rifu-omotenashi.stores.jp/
- 📖 近江さんのブログ
https://c3po3.hatenablog.com/archive



16人目

-お名前

さたけ まきこ
佐竹真紀子さん

-なにをされているひとですか？

利府町在住の美術作家です。



折り重なる記憶の中の情景を、 塗り重ねた絵具の層で表現する。

利府町在住の美術作家佐竹真紀子さんは、東京の武蔵野美術大学を卒業後、実家のある利府町を拠点に美術家として活躍しています。作品に表現される独特の世界観はどのようにして生まれるのかなど、作品づくりについてお話を伺いました。

震災経験で生まれた、 故郷への視点回帰

利府町在住の美術作家佐竹さんの作品には、東日本大震災で津波被害に遭った地域からインスピレーションを受けて制作した立体物や絵が多く、現在、宮城県内外の各地で展示会を行い活躍しています。

東日本大震災が発生した2011年当時、佐竹さんは東京の美大に通う大学1年生でした。地震と津波が起きた日の夜、テレビニュースから流れる被害情報を東京のアパートで見ていた佐竹さんは、画面から伝わる情報がうまのみみえず、強い恐怖と衝撃を受けたと言います。「変わり果てた故郷の沿岸部をイメージしようとした時、漠然とした喪失は理解できても、具体的に失われた一つ一つの風景が細部までイメージできなかったのです」と当時を振り返り「もしかすると自分が生まれ育った土地を、じつはしっかりと見て来なかったからかもしれない」と言います。故郷に思いを寄せながらも後ろ髪引かれるように東京での生活を続けていた佐竹さんは、その日を境に、作品の表現に変化が生じてきたそうです。

失われた場所の記憶を 描きたい

被災沿岸部に実際に足を運んだのは、震災から1、2年後のこと。震災当日のテレビ情報のイメージが残る中現地に行ってみると、意外にもある種美しい光景が見えたと言います。「人が住めなくなってしまった土地なのに、人の所作が残っているんです。例えば、コンクリートブロックで作られた小さな祭壇に花が供えられている。その場所を大切に思う人たちの痕跡が、とても美しく見えました」。そんな光景からインスピレーションを受けて最初に表現したものは、偽物のバス停です。津波の被害を受けた仙台市若林区荒浜地区。町が流



「偽バス停 深沼」

れてしまい、市バスの路線が廃線になった場所です。この頃は、ただ自分が見て感じたものを作品にしていたのですが、元のバス停があった場所に偽バス停を設置したのをきっかけに、かつてその地に暮らしていた人たちとの対話が生まれるようになり、その土地の話を書くことで生ま

れるインスピレーションを絵で表現するようになりました。

震災というと、怖くネガティブなイメージを浮かべることが多いと思います。確かに地震津波という圧倒的な出来事がかぶさってきました。けれど、被災地で出会った人びとに話を聞いてみると「そこで暮らしていた時の楽しい日々の記憶を大事にしている、悲しいだけの場所ではないことがわかった」と佐竹さんは言います。そして、「その方たちが大事にしている情景を、私自身も覚えていきたい」と思ったそうです。そして、その思いが表現につながります。「震災の前と後とのつながりをイメージすると、時間軸がゴチャ混ぜになっているような表現が浮かびます。つらいところだけを切り取るのではなく、その場に確かにある美しさに視点を置いて向き合っていくと、いろいろなつながりが生まれるんです。

時の重なりを、色の堆積で描く

絵は、ちょっと変わった手法を用いて描いています。いろいろな色のアクリル絵の具を幾重にも塗り重ねると、ミルフィーユのような層が出来ます。そうしてできた絵の具の堆積を彫っていく。すると彫る深さ



「日和山の再会」

によって異なる色が出てきます。沿岸部の人たちから昔のことを聞かせてもらうこと自体も、堆積している記憶の層を掘り返すようなもので、どちらもイメージが似ています。「沿岸部の人たちの話を聞いていると、カタチは失ってしまったけど、人々の記憶の層には保たれていることがわかります。彫れば出てくる絵の具の層と重なるんです」。

今後は、もう少し長いスパンで絵を描きたいと思っているそうで「私自身が育ってきた利府という土地についても、地域の人たちの話を聞き、見たものを表現してみたいと思うようになりました」と、佐竹さんの視野の広がりが楽しみです。

取材・執筆 五十嵐千晶

利府町で活躍する事業家を毎号紹介していきます

十符(とふ)とは? ……昔、利府町の湿地帯には、良質な菅(スグ)草が生じ、「菅蒿(スガコモ)」と呼ばれる敷物が作られていました。その菅蒿の編み目が10編あることから「十符の菅蒿」と呼ばれ、みちのくの「歌杖」としてもうたわれていました。これが、「十符の里」「十符の浦」と呼ばれるようになり、十(と)が利(と)に、符が府に変わったと言われています。



「Seaside Seeds」

-作家の情報 佐竹真紀子

利府町在住の美術作家。2016年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。主に絵や彫刻、立体的な造形物などを制作。一般社団法人NOOKのメンバー。

作品の細部の様子▶

